

第33期第5回京都市社会教育委員会議の模様を マナビィがレポート！

平成30年10月3日（水）京都市立西陣中央小学校で、第33期京都市社会教育委員会議の第5回目となる会議が開かれました。「第4次京都市子ども読書活動推進計画の策定について」を中心とした会議の模様をわたくしマナビィがレポートします！

■ 出席委員（17名のうち11名）※五十音順

稲垣 恭子 委員，大八木 淳史 委員，片山 九郎右衛門 委員，久保川 芳弘 委員
齊藤 修 委員，園部 晋吾 委員，瀧野 早苗 委員，平尾 和正 委員，
本郷 真紹 委員，桎木 良子 委員，吉川 左紀子 委員



第33期第5回社会教育委員会議次第

開 会

1 議 事

（1）第4次京都市子ども読書活動推進計画の策定について

2 報 告

- （1）平成30年度指定都市社会教育委員連絡協議会について
- （2）「京（みやこ）まなびミーティング」について
- （3）「京（みやこ）まなびいニュースレター」について
- （4）平成30年度京都市生涯学習市民フォーラムについて
- （5）京都市はぐくみ憲章 平成30年度「行動指針」について

3 主催事業及び刊行物の案内・説明

閉 会

■ 開会挨拶

在田 正秀 京都市教育長から挨拶がありました。



■ 報 告 社会教育委員の一部改選について

○ 事務局から（吉川 生涯学習推進課長）

・社会教育委員会議においては、学齢期の子どもを持つ保護者を代表して、京都市PTA連絡協議会の前会長に社会教育委員にご就任いただいている。先だって京都市PTA連絡協議会の役員改選があったため、千賀 修 委員が退任され、新たに久保川 芳弘 様にご就任いただいた。

○ 久保川 芳弘 委員（平成29年度京都市PTA連絡協議会会長）

昨年度の京都市PTA連絡協議会の会長を務めていました久保川です。分からないこともあります
が精一杯務めますのでよろしくお願いします。

■ 議 事－1 第4次京都市子ども読書活動推進計画の策定について

○ 報告者（川村 西陣中央小学校長）

配布資料 [図書館活用教育の概要](#)



＜京都市立小学校及び西陣中央小学校における図書館活用教育の概要について（要約抜粋）＞

- ・京都市では、非常勤講師を学校司書として希望校に順次配置され、いつも誰かがいる学校図書館に少し近づいてきた。
- ・不読率を改善するためにも、楽しむ読書の経験が豊富であることが大切。「知識を得るための読書」への導きとして「楽しむ読書」がある。
- ・学校の取組で毎日の朝読書、10分間読書などを実施している（京都市は全校実施）。
- ・教育委員会から配布される「読書ノート」も活用し、読書に対する意欲を高める取組を実施しており、年間100冊を読破する児童は全校児童の6割を超える約350名。最多で900冊を超える。
- ・毎年、児童の読書量が確実に増加。色々な教科学習を学校図書館等で行うことも増加。読解力や語彙力も徐々に上がり、「全国学力・学習状況調査」では、読解力等を要するとされる応用問題の正答率が知識の有無を問う基本問題の正答率と遜色が無く、応用問題の正答率の方が高いこともある。
- ・児童が自主的に読書を楽しむ姿も見られ、ビブリオバトルなどは児童自らが企画するようになり、また確実に選ぶ本の質も変化してきた。
- ・下級生に本を紹介したり、読み聞かせをしたりと異年齢の交流も読書を通して実施している。

○ 山崎 弥生 委員（伏見南浜小学校長）【欠席委員からの意見紹介】

最近、インターネットなどの普及により、子どもたちを取り巻く環境が著しく変化しています。青少年ばかりではなく、乳幼児までもスマホなどに子守をしてもらったり、自分で操作したりしている場面も多く見られ、その便利さと弊害について考えさせられる毎日です。親子のぬくもりの中での会話や読み聞かせとは対極にあるものだと思っております。

本校の子どもたちは、朝学習や読み聞かせの取組などで読書に親しむことはできているように思います。しかし、読んでいる本の内容を見ると漫画形式で書かれたものや物語などに偏っており、科学や歴史など知識を広げるための読書はできていないのが実情です。

このような状況の中、読書の幅を広げるという意味で、学校図書館を調べ学習に使うことは大変意義のあることです。インターネットの普及によりパソコンなどで調べたいことがすぐに見つけられる時代になりましたが、その情報量の多さと難易度の不適合から、子どもたちが自分の得たい情報をうまく取り出すことができにくい状況です。その点、図書館の本をもとに調べる方法は、子どもの力に合っていて本当の意味で豊かな学習に繋がります。

ただ、調べ学習に適した本を選び出すことにも難しさがあります。そんな時に活躍して下さるのが、学校司書の先生です。担任からの要望を聞いて本を選んでくださったり、地域の図書館との懸け橋になってくださったり、また授業にも入ってくださって、子どもたちの図書館活用を支援して下さいます。学校司書の先生は、昨年は週に1回でしたが、今年度は週に2回来てくださっています。

その重要性を分かっていたいただいたの配置と喜んでいますが、学校現場としては引き続きの配置をお願いしたいと思っています。

このようにして学校図書館を活用して学習をする経験は、今後の図書館活用につながるのではないかと思います。

○ 報告者（下山 学校地域協働推進課長）

配布資料 [第4次京都市子ども読書活動推進計画の策定について](#)

<京都市子ども読書活動推進計画の概要について（要約抜粋）>

- ・子どもの読書活動に関する施策を総合的・計画的に行うことを目的に「子どもの読書活動の推進に関する法律」が平成13年に制定。子どもの読書活動推進のための基本理念や国と地方公共団体の責務が定められている。
- ・本市では平成16年以降、国の計画に準じ「京都市子ども読書活動推進計画」の策定・見直しを進めており、現在は「第3次計画」（計画期間：平成26～30年度）に基づき、家庭・地域・学校等との連携による子どもの読書活動の推進に向けた様々な取組を展開している。
- ・現在、平成31年度から5年間の指針となる第4次計画を策定するため、策定委員会の開催やアンケート調査の実施などを進めており、今後は素案の作成、パブリックコメントの実施などを経て、今年度末には計画を策定する予定である。

○ 報告者（河合 生涯学習部課長補佐）

配布資料 [市立高校生アンケート結果の傾向及び考察](#)

[市立高校生アンケート結果](#)

[市立高校生アンケート結果②](#)

<市立学校児童・生徒を対象としたアンケート調査の結果について（要約抜粋）>

○ 小学生・中学生について

- ・このアンケート調査は本年7月に、京都市立小学校50校、中学校24校を抽出し、その児童生徒と保護者を対象として実施した。
- ・前回調査と比べ、「読書が好き」との回答や「1ヶ月の読書量」は増加し、学校図書館の貸出冊数も増加している。
- ・保護者の読書に対する意識と子どもの読書状況の関係性については、読み聞かせの経験や保護者の読書量が多いほど、子どもの不読率が低くなる傾向が見られる。
- ・1ヶ月の読書量は、「0～2冊」との回答が減少し、「3冊～8冊」との回答が増加。「11冊以上」と回答が2%程度減少している。
- ・第3次計画は特に中学生に焦点をあてた取組を推進し、中学生の不読率は大きく改善した。
- ・休日の過ごし方では、依然として中学生では「クラブや部活動」が1位であるが、大きく減少し、「携帯電話・スマートフォンを使う」との回答が大きく増加した。

○ 高校生向けアンケート

- ・国の計画においても高校生の読書活動推進がひとつの課題となっている。今回初めて実態把握のため、全ての市立高校生を対象としたアンケート調査を実施した（5621件の回答）。
- ・読書が「好き・少し好き」との回答は全体の約8割に上る。また、読書が「大切だと思う」との回答は9割以上の回答結果であった。読書を肯定的に捉えている生徒の割合が高い一方で、高校生に

なってから「ほとんど読まない・あまり読まない」との回答も約8割に上る。

- 平日より休日に読書をする生徒が多い傾向にあり、読書時間は「30分まで」との回答が多い。
- 本の入手先は、学校図書館の活用が公立図書館等を下回っている。また「家」が入手先の2番目となっていることから、家族が読書をするなど本が身近にある環境が生徒の読書習慣に影響を与えていることがうかがえる。
- 小学校から中学校、高校へと学年が進むほどに、読書の機会が劇的に減っていく状況である。
- 高校生が「読書をしない・できない」理由としては、「勉強が忙しい」「部活が忙しい」「スマホ等を使用する」との回答がいずれも2割前後となっている。
- 読書をする理由としては、「読書が楽しい」との回答が約45%、「知識や情報を得られるから」との回答が約21%、「時間つぶし・暇つぶし」との回答が19%となっている。読書に楽しさを感じている生徒ほど、時間をとって本を読んでいるという状況であり、読書を娯楽としてとらえている生徒が、読書続けている生徒の中では多いと考えられる。

○ 齊藤 修 議長（株式会社京都新聞社総合アドバイザー）



読書に関しては前々回の会議でも取り上げましたが、それだけ重要なことだということに思います。教育長の挨拶にもありましたが、平成16年度から子ども読書活動推進計画を策定し、取り組んでこられたが、それでもなお子どもたちの読書離れが止まらないということでもあります。特に今回は高校生についてご意見をいただきたいということですので、様々な角度からご意見をいただければと思います。

○ 稲垣 恭子 委員（京都大学大学院教育学研究科長）



古い見方かもしれませんが、大学でも知的好奇心というものが教養を支えています。かつてはこの知的好奇心を満たすものが読書だったのですが、本よりも刺激が強いものが色々ある今日では、時間がかかり一過的な刺激の弱い読書が後退していくことはどうしても仕方がないことなのかという気がしています。本自体もそうした状況を反映し、タイトル一つをとっても刺激が強いものばかりになってきています。普遍性のある古典のような魅力を持つ本の割合は低下していく状況にあるように思います。また、読書の良さが情報収集としての読書に傾いていますので、本来の知的好奇心を触発するというような、教養に繋がるような読書を見つけにくくなっています。

そうしたことから、小学校で行われているビブリオバトルは面白い取組だと思いました。これまで読書で知的好奇心を満たす場合は、一人で読んで楽しむものでした。しかしこの取組では、「みんなで集まって本について批評し合う場」「読書を通じた色んな人との交流の場」であるということが、一人で情報を得るといったインターネットとの大きな違いだと思います。具体的な場を持って批評し合うことで新しい読書への触発にも繋がっていると思います。また、自分の批評眼も磨かれることや、他者の批評を聞くことで異なるものの見方や異なる世界が開けます。新しい知的好奇心の触発には他者と一緒の場を持つということが有効であるということと、一人なら選ばないような本を選ぶようになり得ることは大きいと思います。

高校生の場合には、なかなか読書をする時間が取れなくなっており、情報の一つとして探究学習の

時に何かを調べるのに使う程度だということは分かるのですが、ビブリアバトルなどの取組を高校生にも広げるチャンスがあれば、触発されたり高校教育や受験、大学段階での探究学習にも繋がっていくと思います。また、高大接続の一つの軸としても「読書の場」を作っていくというのは使えるなどと思います。嫌がるものを無理に読ませるのではなく、面白いから読みたいという、アンケート調査にある「読みたい本が無い」「楽しくない」「本以外に情報を得る方法がある」という回答に responding していく仕組みを提供していく必要があると思います。

○ 本郷 真紹 委員（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）



私は大学現場にいて、この問題は非常に深刻なものだと捉えています。まず、本というものを明確に区別しておかなければならないと思いますが、電子媒体は本ではない、電子書籍は本ではない。本は紙媒体でなければならぬと考えています。最近、AIなどの普及に伴い、かなり紙媒体というものが敬遠されています。例えば、大学のレポート提出でもほとんどが電子媒体で提出を求められるようになってきました。昨今、大学生は本離れがあって、その次にパソコン離れが進んでいます。パソコンからタブレット機器へ移り、大学生の多くがパソコンを使えなくなっています。どうしてかというとスマホで全て済んでしまうからです。ですからキーボードが打てなくなって、これをどうするんだとの話になっています。

発端の一つは資源問題です。紙媒体から電子媒体に変えると資源を守ることにつながるという観点から奨励されてきたのですが、根本的に電子書籍と紙媒体の本には違いがあります。それは、電子書籍には書き入れができないことと充実感が無いことです。有り体に申しますと電子媒体の書籍というのは全て一過性の物です。頭の中には残っても自分でメモをとることはできません。手垢が付いたことによる充実感、ボロボロになることによる思い、そういったものが全くなくなります。その結果どういったことが起こっているかと言いますと、高校段階や大学段階で最も必要と言われているクリティカルシンキング（批判的思考）が出来なくなっています。批判的な読書というものが出来なくなっています。一方的に情報を受け入れる情報収集でしかなくなっています。私は、読書というものは情報収集とはちょっと違うと考えています。確かに読書にも情報を得るという側面はありますが、そこから更に自分なりの想いや考えを構築していくことが大事なことであり、それができなくなっているというのは非常に深刻な問題だと思っています。

最近新聞報道などでもよくありますが、国においてもAI教育などが推進され、ますますの情報教育や統計を中心とした数学などに重点がおかれ、入試でも必修化するとされていますが、なにゆえか文書を自ら書くことなどに対する配慮が十分ではない。このまま放っておくと自分なりのオリジナルの考えを構築することができない学生、あるいは構築できたとしても表現できない学生というものが出てくるということが非常に危惧されます。

やはり早く手を打つ必要があると思いますが、アンケートの中でも「なぜ本を読まないのか」との問いの3番目に多い回答で「スマホで済むから」というものがありました。これが一番深刻だと思います。もう一点は、今はまだ親世代が本というものに慣れ親しんできた世代であり、その子どももまだ親が本を読んでいる姿を目にしていると思います。しかし、だんだんと紙媒体の本を読まない世代が親になると、今言ったような課題をどのように改善するかが大変な問題になると思います。

○ 瀧野 早苗 委員（市民公募委員）



自分の高校生の時の経験から、本は数多く読むことも大切ですが、一つの本を深く読むことも大切だと思います。読んで終わりにするのではなく、小さなグループで読んだ本について議論などをするのもとても意義のあることだと思っています。自分の言葉でその本について話すという前提があると、内容をもっと理解しながら読むようになると思いますし、議論することで自分なりの意見が生まれたり、理解が深まるのではないかと思います。仲間と本を読むことで最後まで読み切るようになるという気がします。

私が高校生の時の授業で、5・6人のグループで哲学者の思想をそれぞれ調べて発表するという授業がありました。私はデカルトについて担当したのですが、本を読んだだけでは分からなかったことが、友だちと話しているうちに自分なりの理解ができてきました。難しい本であっても、皆で取り組むことでチャレンジする気持ちも生まれるのではないかなと思います。

昨年、社会教育委員全国大会の記念講演で講師の方が話されていたことで、「夢を叶えるためには伝記を読むといい」というお話がありました。何故かという、伝記には夢を諦めなかった人しか出てこないから。とのことでした。家庭でも伝記を家族で読むことで生き方探究教育にも繋がるのではないかと思います。

○ 大八木 淳史 委員（ラグビー元日本代表、丸貴管鋼株式会社顧問）



高校生の読書離れについて問題提起されていますが、高校生に必要なのは近くの大人が助言することだと感じています。近くの大人とは保護者や学校の先生、部活の先生などです。高校生は大人の話聞いていないように感じています。

ビジネスにおいてもコーチングが取りざたされていますが、優れたスポーツのコーチは色々なポジション、色々な人にそれぞれ違ったことをアドバイスができ、その上でチームを一つの方向に導くことができます。これには一人一人をよく見ていないとできません。学校の先生も全員に同じことを言って同じ方向に導くことは簡単ですが、一人一人に合ったアプローチをしていくことが大切ではないでしょうか。こうしたことは教員の負担につながりますが、個人との繋がりというものに高校生などの世代は敏感だと思うので効果的なのではないでしょうか。先生などが「こういう本を読んでみては」と直接的にアプローチしていくことも一つの手ではないでしょうか。

○ 片山 九郎右衛門 委員（観世流能楽師）



私は、高校生が一番つかみどころが難しい年代だと思っています。逆に小学校の4・5年生ぐらいが一番接しやすいかなと、私が行っている取組を通じて感じています。対処法というのは特に考えていないのですが、一番肝心なのは公・社会がどんな人物を求めていくのかだと思います。これが短期間でぶれていくと子どもたち自身がどちらに向けばいいのか戸惑ってしまいます。これが一番大きな問題だと思います。

ひいては大学受験というものを世の中がどう考えるのか。そして高校生たちがどこに向かって進めば自分たちがより良い方向に進めると考えるかだと思います。そうしますと、現状、高校生に時間が無くなっているのは当然かなと思います。世の中の流れが実学に向いていて、実用面

やビジネス面から国際化社会に根ざした教育をして欲しいということが強く言われている中で、文化的な側面がどの程度残っているのか、ということが一番大きな問題ではないでしょうか。一番多感な時期である中学生や高校生うちに色々なものに触れて欲しいと思っています。

私も紙媒体が好みでして実際に本を作ってみた経験から、編集から字体、行間、文字数など色々なものを考え抜いた形というのや、本をめくっていく時に一つの劇場が開いていくことを感じながら本の世界に入っていく、本は一つの芸だと思っています。

物事を調べる情報収集としての読書に関しても、やはり紙世代が懐かしいと思うのは、一つのことを調べていく中で興味が段々別のところに逸れて行くことです。これは本来の目的ではないのですが、それが自分の次の未来への一歩に繋がっているということ、子どもたちに経験させてあげたいと思っています。うちの子どもが試験勉強のためにインターネット検索などを行っているのを見ると、本当に一方通行な知識の入れ方だなと感じてしまいます。

ただ高校といえども、先生たちが各校の学校図書館の特色がどうなっているのかを情報共有することや、同じ世代の高校生たちがどういった本を読んでいるのかを、子どもたちに先生が勧めるようなことは続けて欲しいなと思います。これは各書店が平置きの本について工夫することと同様な気がします。どんなに多くの本を並べていても飽き飽きする書店もありますし、平置きが優れている書店には立ち寄りたくなります。

また、家の本棚が大切だと思います。自分が興味を持つ本が増えていきますが、家族が興味を持っている本も並んでいます。私自身、父や姉など自分よりも年上の家族の本は触れてはいけない本のような気がしつつも、ちょっと背伸びをして手に取った記憶があります。また、先生に勧められて読んだけれども当時はつまらなかった本が、何十年もたってみると書庫の中で輝いて見えたりと。家の中に本があるかどうか、本離れになるかどうかの境目になるのではないかと考えています。

○ 齊藤 修 議長（株式会社京都新聞社総合アドバイザー）

事務局から提示されたデータの中に、「家の中に本が多ければ本をよく読む傾向にあり、少なければ本を読む量も少ない」というのがありましたね。

○ 榎木 良子 委員（同志社大学日本語・日本文化教育センター嘱託講師）



読書をしている子どもとしていない子どもとの比較で、読書の良さや利点を測った統計やそうした研究をしている方はいらっしゃるのでしょうか。もしそうしたデータの中で、幼少期から読書に親しんでいる子どもたちの学力は高くなるなどの結果が出ていけば、それを幼児の保護者に伝えることは有効ではないでしょうか。最近多くのお母さんやお父さん世代がスマホばかりになり本を読まなくなっていますが、読書の効果が分かれば教育に熱心な保護者は、読書にも熱心に取り組まれるのではないかなと思います。よくダイエットのCMなどでこうすればこんなに痩せたというようなCMになっているように、効果が目に見えると訴えかける力も違うと思います。

先ほど校長先生から、朝の10分だけでもこの5年間で読書量が5倍になったとお話がありましたが、高校生が受験勉強やクラブ活動などで忙しく小学生の時と同じぐらいの読書時間が取れなかったとしても、小さい頃の習慣は大人になった時にいつか戻ってくることに繋がると思います。小さい頃に習慣を付けるというのが大事ではないかなと思います。

私が中学生の時、生徒会役員同士や何かの委員同士で他校との交流が活発でした。子どもたち同士で「自分の学校ではこんなことをしているよ」などと情報交換をし、他校の生徒会役員から聞いた取

組を自校でもやってみたりしていました。子どもたちには大人が知らないような観点があると思いますので、大人が押し付けるのではなく、子ども同士で主体的に動ける様な仕組みも必要だと思います。

○ 事務局から（在田 教育長）

今、手元にデータは持ち合わせていないのですが、毎年実施されます「全国学力・学習状況調査」で「毎日のどれぐらいの時間、読書をしているか」と学力のクロス集計をしています。その[集計結果（※読書と学力の関連は10ページ目）](#)は全ての保護者の皆様にもお知らせしているところです。

小学校では、読書を一番多くしている層の学力が最も高く、中学校では一番多く本を読んでいる層の次の層の学力が一番高いとの集計結果が出ています。中学校が小学校と異なるのは「本ばかりを読んでいて勉強時間を潰してしまい足りていないからだ」との分析ですが、読書量の一番多い層と2番目に多い層との学力はほぼ同じ程度で若干低い程度です。一方で、小中学校に関わらず本を読んでいる層は学力が一番低いとの結果になっています。もちろん、これ以外の研究成果もあると思いますし、それはまた色々な形で家庭に発信していければと思っています。

○ 稲垣 恭子 委員（京都大学大学院教育学研究科長）

「全国学力・学習状況調査」のように、本学の独自調査の一環で読書に関連した調査があります。中学3年生の時の成績から大学入学時までの成績で見ているのですが「子どもの時に家庭で寝る前に読み聞かせをしてもらったことあるか」との問いに「ある」との回答をした子どもの方が、学校での成績が高いとの傾向にあることが何度かの調査で確認されています。

ただ、男女別で分析すると、女子の方がより読書と成績の相関関係が顕著であり、男子に関しては読書量と成績の関係より、塾や通信教育などにかけた金額との関係の方がよりストレートに学力に現れるとの結果が出ています。必ずしも読書に親しむことが学校の成績に直結するとは限らない面もあるのですが、全般的に見ると子どもの頃に本に親しんだことと学力には関連があると思います。

○ 本郷 真紹 委員（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

専門分野ではありませんので数値化したことはありませんが、大学入試や卒業論文の作成評価等に長年携わってきた経験から明確に申し上げられるのは、高校に入ってから国語力を身に着けるのは無理です。はっきり申し上げて、大学入試で求められるようになる記述・論述式問題の成否は、全て小学校の時にどれだけ本に親しんだかにかかっています。要するに取ってつけたような受験勉強では絶対に出来ません。大学での卒業論文や修士論文を作成するときの文書構成力・表現力、その中に含まれる思考性は、小学校段階までにどれだけ本に親しんできたか、幼少時に親から読み聞かせをしてもらったかにかかっています。個人がどれだけ志を持って取り組んでも中学校の最終段階や高校生になってからでは無理です。我々はそのことを明確に認識して、小学校段階で読書習慣を身に着けさせることが長い目で見て非常に大きな意味があります。

○ 吉川 左紀子 委員（京都大学こころの未来研究センター教授）



西陣中央小学校の取組は素晴らしいと思いました。読書は基本的に個人の行為で、ひとりで読んで自分の時間を持つということが中心になるわけですが、それを子どもたちの社会的な関係の中に広げていき、その取組が相乗的に、子どもたちの様々な知的活動を高めていくということがはっきりと例示されたような気がします。全国の小学校に、こうした取組が広がっていけば良いと思いました。

事務局から説明いただいた高校生のアンケート調査ですが、「本が好き・本は大

切だ」との回答が8割に上っており、本に対するポジティブな考えは高校生でもかなり多くの子どもたちが持っています。ところが一方で、読書をしているかという点、「一週間全く読んでいない」という高校生も同じぐらい多い。この二つの回答結果のずれが面白いと思いました。アンケートの記述部分を読んでみると、小中学校では朝読書があったとの回答がかなり多く見受けられます。高校では朝読書がなくなったことが読書時間の減少の原因のひとつかもしれません。1日10分程度の時間、読書をするということを高校でも続けたとしたら、中には10分以上読みたくなくて、20分、30分と本を読む子どもたちも増えるのではないかなと思うんですね。そうした習慣が身につけば1日・1週間の読書時間は自然に増えていくと思いますし、1週間全く読まないとの回答も減るのではないかなと思います。1日のほんの僅かな時間でも、皆で読書をするという時間を日常の中で持つことはそれほど難しくないのではないのでしょうか。小中学校での効果がこれだけあるのであれば、その蓄積の効果は高校でも同様だと思います。「1日10分の読書時間」が取れるかどうか、結果として大きな違いになっていくのではないかな、そうしたことがこのアンケート調査に現れているように思いました。

○ 久保川 芳弘 委員（平成29年度京都市PTA連絡協議会会長）



西陣中央小学校の図書館は扉が無く入りやすいなと思いました。うちの子どもの通っている学校では、図書室が無くなってしまい通路に本が置いてあるんですね。そういった状況なので、本を置いてある所に立ち寄ることはあっても、そこで本を読むということは少ないのかなと思います。

我が家には小学生から高校生までの子どもがいますが、年上の子ほど本は読んでいないように思います。小学校での朝読書や小さい頃の読み聞かせで本の良さは知っていると思いますが、高校生になりますとクラブと宿題で時間に追われて後は寝るだけというような生活になっています。私たちも小学生の子とは、読んでいる本について話題にしたりしますが、高校生の子とはそういったことも無いように思います。家庭でももっと読んだ本について感想を言い合うような雰囲気づくりをしていかなければいけないかなと思っています。また、高校でもそうしたことをしていただければもっと本を読むようになるのかなと思います。

○ 平尾 和正 委員（市民公募委員）



アンケート調査で高校生に時間が無いというのは明らかで、皆さんも共通認識をお持ちなのかなと思います。高校生の不読率を減らすということに関しては、短時間で本を読む隙間読書を勧めていくのが現実的ではないかなと思います。

以前、リクルートが「R25」というフリーペーパーを刊行していましたが、記事の文字数を減らして、通勤時間内で一冊を読み切れる様な構成にしたことで大人気のフリーペーパーとなっていました。一日の中で一冊に没頭するのは難しいと思いますので、小説などは章ごとに一週間かけて読み進めていくなど、時間が無い中でも読書の楽しさを維持していけるよう短い時間で読める本の紹介など、読書に対する興味を失わせない仕掛けというのが現実的ではないでしょうか。

スマホに時間を取られているとのことですが、スマホの持つコミュニケーションツール、娯楽ツール、情報収集ツールとして機能のうち、情報収集ではその速さに関して読書はおそらく勝てないと高校生は思っていると思います。ですからこの点ではなくコミュニケーションや娯楽の部分でスマホから読書に置き換えていくのが一つの策かなと思います。そうした場面を想定して計画を策定すべきではないかなと思いました。

○ 園部 晋吾 委員（NPO 法人日本料理アカデミー地域食育委員会委員長，山ばな平八茶屋若主人）



アンケートの調査結果ですが、「本が好きか・大切か」というような問いは誰に聞いても肯定的な回答になると思います。重要なのは大切だと回答に「何が大切なのか」「なぜ大切なのか」等のもう一段掘り下げた質問が必要なのかなと思います。高校生は「なぜ大切なのか」が分からないから読めない理由・読まない理由を数多く挙げていくことになってしまうのではないかと思います。本当は大切だと思っているけれどこうした理由で読めないんだということに繋がってしまっているのではないのでしょうか。

そうではなくて何が大切なのかをきちんと把握できて考えていけるようになれば，少ない時間でも読むようになりますし本を読むための時間も作ろうとするようになると思います。これは社会に出て仕事をしている時と全く同じです。日常の中での優先順位を付けるようになっていて，その中で読書の優先順位はかなり後の方になっているんです。

私も読書は好きですし大切だと思っています。けれども今読んでいる時間を聞かれるとほとんど無いんですね。何故かと言いますと本を読もうとする気持ちの余裕が無いんだろうなという気がしています。

ただ，高校生の段階でこれだけ多くの子どもが読書を大切だと思っていることはすごく大事なことだと思います。これは特に小学校段階で読書は大切だということが刷り込まれているからだだと思います。そういう意味で小学校段階での熱心な取組は大切だと思います。

私も大学で非常勤講師を何年か務めたことがあります。京料理実践ということで講義と調理実習をやっていたわけですが，期末にあたり実習試験をするわけにもいきませんのでレポート作成を課題としました。そのレポートは，「ボールペン」で「90分間」で「800字」で作成するようにとの制限を設けました。その代わりに手書きの物であれば試験会場に何を持ち込んでも良いということにしました。なぜかと言いますと，事前にまとめてこない限り90分でかつ800字以内に課題の内容を書ききれないわけがないと考えたからです。そうしますと，今の大学生はこんなレベルのレポートしか書けないのかと思いました。800字に収まっていない学生，反対に600字程度しか記述していない学生，文書構成が出鱈目の学生，表現力が未熟な学生など先ほど本郷委員がご指摘されておられた通りでした。

本を読むことの大切さというのはこういう所にあるのかなと思っています。まず，他者の人生を追体験出来ることが大事なことだと思います。そして言葉の表現力・構成力というのはすごく大事ですが，これは読書でしか身につかないと思います。

一方で知識を得るということに関しては，今はインターネットが本当に優れています。エクセルを使いこなすために分厚い説明書を読むのは時間の無駄で，「エクセルを使ってこういうことをしたい」とインターネット検索すれば色々な人が回答してくれていますので大変な時間短縮ができます。ですので，読書とインターネットをしっかりと区別してどちらも大切だと，両輪で進められるべきだと思います。

○ 齊藤 修 議長（株式会社京都新聞社総合アドバイザー）

今日の議論のポイントは高校生の不読率が高いという点で，部活動と勉強，スマホに時間が費やされているということを教育委員会が認識している中で，この課題に対処する方法をとということでありました。本日，委員からのご指摘で解決につながるようなご意見もあったものと思いますので生かしていただければと思います。

○ 村上 学校指導課参与

多くのご意見を高校教育のためにありがとうございました。高校の教育現場において何も高校生が本を読まなくて良いと思っっているわけではありません。たくさんの本を読んでもらいたいと様々な手を講じてきたつもりですが、なかなか結果に繋がっていないというのが事実です。本日は貴重なご意見をいただきましたので今後に活かしていければと思っています。

今回、高校の指導要領の改訂がありました。大学入試改革もございまして、高校における学びも大きく変わらなければなりません。端的に申し上げますと主体的・対話的で深い学び。これには私は読書が必要不可欠だと考えています。園部委員がご指摘されました通り、文書をきちんと読み解く力や表現する力、あるいは探究していく力、これが大事だと思っています。これらは読書から得られるものと思っています。これにどう取り組んでいくかが今、高校教育の喫緊の課題でございます。

ご承知のとおり京都市だけでなく、探究活動は全国の高校でどんどんやっており、ほとんどの高校で取り組まれています。これには、やはり自分で課題を見つけることや自ら探究していく主体的な学びが必要です。そのためどこから学ぶか、もちろんインターネットの活用などもありますが、一番大きいのは書物です。従って今でもかなりの高校生は読書をしています。高校生はアンケート結果の様に「本を読んでいない」ということは無いと、私は思っています。確かに「文学作品や物語を一冊読み切ったりしているか」ということであればそうではないと思いますが、かなりの書物・書籍に当たっている場面はよく目の当たりにしています。

今後、高校教育では探究活動を行うための条件としての読書というのは絶対に必要でありますし、これを促していく教育をどんどん支援していかなければならない。教育委員会はそのための環境作りや指導方法の改善をしていかなければならない。これらは皆様のご意見と一致していることだと思っております。今後、そのような形で取り組んでいければなと思っていますので、引き続きご支援をお願いします。

■ 報 告—1 平成30年度指定都市社会教育委員連絡協議会について

配布資料 [平成30年度 指定都市社会教育委員連絡協議会について](#)

○ 事務局から（吉川 生涯学習推進課長）

- ・指定都市社会教育委員連絡協議会は、全国の政令指定都市の社会教育に関する取組の情報交換の場として開催されている。今年度は7月に川崎市で開催された会議に、瀧野委員に出席いただいた。
- ・10月には青森県で「全国社会教育研究大会」が開催される。これについても、瀧野委員にご出席いただくことになった。

○ 瀧野 早苗 委員（市民公募委員）

各都市の報告を聞かせていただいた中で、一番記憶に残っているのは「学びの成果を活かす施策について」ということです。浜松市と大阪市の報告でしたが、両市とも市民が学びの成果を活かして、地域住民に学習機会を提供するという仕組みがあるそうです。生涯学習施設や地域の学校の特別教室などを活用して、様々な講座を市民の方が企画し実施されているとのことでした。京都市でもそのような取組ができないかなと思いました。

■ 報 告—2 「京（みやこ）まなびミーティング」について

配布資料 [京まなびミーティングについて](#)

○ 事務局から（吉川 生涯学習推進課長）

- ・今回は、京都市職員を対象とした「文化力講座」において、「浴衣の着付けと美しい所作」を学ぶ講座を榎木委員に実施いただいた。
- ・この「文化力講座」は、「文化首都・京都」の職員としてふさわしい知識や教養を身に着けることを目的に、京都市職員が勤務時間外に任意・自主的に参加する研修である。今回はきもの文化に親しみ、きものを着る機会を増やそうとの趣旨で実施した。

○ 榎木 良子 委員（同志社大学日本語・日本文化教育センター嘱託講師）

沢山の応募をいただいたそうですが、私一人でお伺いさせていただきましたので30名程度にさせていただきました。京都市役所の職員が、京都から着物文化などを発信できるようになるための研修ということでお話をいただいたのですが、受講生の皆さんに熱心に受講頂きました。

ちょうど大学でも留学生と日本人学生を対象とした着物の授業を行っているところでして、ちょうどこの研修の時期に前期のレポートの提出が学生からありました。「京都におけるこれからの着物」という課題を与えたのですが、日本人学生もその多くは地方から京都に、留学生も様々な国から京都に来られているのですが、文化都市であり歴史のある都市だからということで京都の大学を選んでいようので、多くの学生のレポートの中には「これからの着物文化は京都が発信していくべきだ」と書かれていました。

色々な地域や国から来て学んでいる学生の方が客観的に京都を見ていて、これだけ環境が揃っている京都が積極的にやっていかなければならない。伝統は古い物を守り継ぐだけでなく新しい物を取り入れながら、どうすればその良さを伝えて行けるか等を考えています。研修後のアンケート結果のご報告もいただきましたが、京都市職員の方々も意識高く取り組んでいただいているようで、ありがとうございました。

■ 報告-3 「京（みやこ）まなびいニュースレター」について

配布資料 [京まなびいニュースレター第18号](#)

[京まなびいニュースレター第19号](#)

○ 事務局から（吉川 生涯学習推進課長）

- ・市民の学びのきっかけとして、京都市の生涯学習情報を発信する「京まなびいニュースレター」において、社会教育委員の皆さまにコラムを寄稿いただいている。
- ・今回は、8月に発行した18号において、齊藤議長に「情報の大海原を生きる」と題したコラムを、また9月に発行した19号では、稲垣委員に「コミュニケーション力と沈黙思考力」と題したコラムをご執筆いただいた。
- ・今回から、ニュースレターをアスニーが発行する「まなびすと」に掲載し、これまで以上に多くの市民にご覧いただき、アスニーや図書館での学びにも繋がればと期待している。
- ・次回は片山委員に執筆をお願いした。12月に発行される「まなびすと」に掲載の予定。

■ 報告-4 「平成30年度京都市生涯学習市民フォーラム」について

配布資料 [平成30年度京都市生涯学習市民フォーラムについて](#)

○ 事務局から（吉川 生涯学習推進課長）

- ・今年度は、11月5日（月）、同志社大学寒梅館で開催する。
- ・総会に続く講演・シンポジウムでは、「科学がつくる未来と人の心の豊かさ」をテーマに、脳情報科学者で、ATR脳情報通信総合研究所 川人 所長を講師・パネリストに迎えた基調講演・シンポ

ジウムを実施する。

■ 報告-5 「京都市はぐくみ憲章 平成30年度『行動指針』について

配布資料 [京都市はぐくみ憲章リーフレット](#)

○ 事務局から（中芝 子ども若者はぐくみ局はぐくみ文化創造発信課長）

- ・憲章実践推進条例において、毎年度の具体的な実践方策として行動指針を定めることとしている。
- ・「レッツはぐくみアクション～子どももえがお 大人も笑顔～」が今年度の行動指針のテーマ。京都市はぐくみ憲章の理念を簡潔に伝えるためのものとして地域で活動する団体などに大変好評。
- ・リーフレットには、条例に基づいた緊急の方策に関する行動、基本的な方策に関する行動に対応する行動を行動指針として掲載。
- ・推進協議会において子どもたちの安全に対する懸念が多数出たことを踏まえ「笑顔の前提は安心安全であること」そのための行動を促す内容を記載している。
- ・当該リーフレットは自治会・町内会を通じて回覧いただいているほか、学校・幼稚園・保育所・児童館への配布、市立図書館や各区役所など本市関係施設にて配架している。

■ 主催事業 及び 刊行物等の案内・説明

○ 事務局から（吉川 生涯学習推進課長）

- ・生田前京都市教育長が、佛教大学教育学部教授に就任しており、研究の一環として京都市内にある教育に関する石碑（いしぶみ）を調査し、論文にまとめたので紹介させていただく。

○ 事務局から（松野 生涯学習部担当課長）

- ・京都アスニーの事業を二つ案内させていただく。京都アスニーでは11月1日が古典の日と法制化されたことを踏まえて、平成20年度から毎年、「古典の祭典」事業を行っている。今年度は京都市社会教育委員会議前議長であられた井上満郎先生に「古典の中の京都～貴族の時代から武士の時代へ～」とのテーマで講演と対談を実施させていただく。
- ・世界文化自由都市宣言40周年、京都・パリ友情盟約締結60周年を記念する新規事業として「パリのボヘミアンたちの悲恋物語」と題したオペラのステージを12月9日に開催する。これについては事前申込制ということで9月から申し込みを受け付けているが、大変好評であり2週間程度で定員に達している。

■ 閉会 [齊藤議長]